

原 著

子どもの発達に焦点をあてた地域の役割 —子どもの認識するソーシャルキャピタルの測定から—

岡正寛子*1 田口豊郁*2

要 約

高度成長期以降、少子高齢化や核家族化の進展は、これまで地域を支えてきた地縁や血縁による関係性を希薄化させ、地域コミュニティの衰退を招いた。

地域コミュニティの衰退は、子育て・子育てに対しても大きな影響を及ぼした。もともと子育ては、親族や地域社会の互助を前提として行われてきたが、地域コミュニティの衰退に伴い困難となった。子育てにおいても、生活習慣の変化から、運動能力の低下や意欲低下などの子どもの成長に影響を及ぼしている。つまり、子育て・子育てに対して地域コミュニティの役割は大きく、地域の関係性を踏まえた環境整備が重要である。

本研究では、子どもの発達に焦点をあてた地域環境の整備について検討するため、子ども自身が認識する子どもと地域との関係の実態をソーシャルキャピタル（以下SC）の概念を用いて調査した。調査は、①子どものSCの測定、②小学生のSCと中学生のSCとを比較検討、③SCと生活満足度・セルフ・エフィカシーとの関連性の検討を行った。

調査結果は、以下の5点に要約できる。①「つきあい・交流」では、友人と障害のある人との「つきあい・交流」以外は、小学生の方が中学生よりも密に行っていた。②「信頼」では、すべての対象者（家族、親戚、友人、先生、近所の大人）への信頼度も小学生の方が中学生よりも高くなっていた。③「社会参加」では、全ての活動（ボランティア活動、地縁的活動）で小学生の方が中学生より参加率が高くなっていた。④SCの構成要素は「能力の社会的動機付け」に影響を与える。特に、小学生ではSCの構成要素である「つきあい・交流」からの影響が大きい。⑤SCの構成要素である「信頼」が、生活満足度に影響を与える。

小学生と中学生間で子どもの認識するSCに差が生じる背景には、心理的発達と子どもを取り巻く環境が影響していることが示唆された。また、子ども自身のSCが、子どもの行動や生活に影響していることが明らかとなった。

1. はじめに

高度成長期以降、少子高齢化や核家族化の進展は、これまで地域を支えてきた地縁や血縁による関係性を希薄化させ、地域コミュニティの衰退を招いた。

地域コミュニティの衰退は、子育て・子育て（子どもの育ち）に対しても大きな影響を及ぼした。もともと子育ては、親族や地域社会の互助を前提として行われてきた¹⁾。しかし、地域コミュニティの衰退により、家庭を中心とした子育て（自助）に重き

がおかれるようになった。親同士が子育て情報を交換し、助け合う機会が少なくなり、子育てをする親が孤立していく傾向がある²⁾。育児不安や育児ストレスの相談ができないといった孤立状態が、児童虐待などの社会的問題に繋がっている。

一方で、地域コミュニティの衰退は、子どもの生活習慣を変化させ、子ども自身の成長にも大きな影響を及ぼしている。例えば、子どもの遊びは、外遊びから内遊びへ変化し、テレビが子どもの遊びの中心的ツールとなった³⁾。テレビの視聴は、受動的な

*1 川崎医療福祉大学大学院 医療福祉学研究科 医療福祉学専攻 *2 川崎医療福祉大学 医療福祉学部 医療福祉学科
(連絡先) 岡正寛子 〒701-0193 倉敷市松島288 川崎医療福祉大学
E-Mail : w7108002@kwmw.jp

生活姿勢、運動不足、肥満、衝動的行動の増加、コミュニケーション能力の低下、発語の遅れなどを招くことが明らかにされている³⁾。また、ユニセフの調査（経済的開発協力機構加盟25か国を対象とした15歳の意識調査）の結果から、日本の子どもは、運動意欲、遊び意欲、学習意欲が落ち、世界的に突出して孤独を感じていると日本学術会議は指摘している³⁾。

政府は「新エンゼルプラン（2000年）」、「健やか親子21（2001年）」、「男女共同参画基本計画（1999年）」など、「少子化対策」という視点から、社会全体で子育てを支援する施策に取り組んできた。しかし、子ども・子育て白書で、「これまで進められてきた少子化対策の視点からは、真に子ども・若者のニーズや不安、将来への希望に応える政策を生み出すことができていなかった」と指摘され⁴⁾、平成22年に「子ども・子育てビジョン」が策定された。

「子ども・子育てビジョン」は、「子どもが主人公（チルドレン・ファースト）」という基本的な考えのもと、これまでの「少子化対策」から、「子ども・子育て支援」へと視点を移している⁴⁾。

しかし、現状は、大人が考える「子どもが主人公」という「子ども・子育て」支援となっていることが多い。大人の立場から「良かれ」という環境だけではなく、子ども自身の性格と嗜好に応じて子どもが選択できる環境が必要といえる²⁾。特に、前述したように、子育て・子育てに対して地域コミュニティの役割は大きく、地域の関係性を踏まえた環境整備が重要である。

地域の関係性を理論的に説明するものとして、「ソーシャルキャピタル（以下SCとする）」という概念がある。SCは、市民社会資本あるいは社会関係資本とも呼ぶべきもので、信頼、相互扶助などコミュニティのネットワークを形成し、そこで生活する人々の精神的な絆を強めるような、見えざる資本である⁵⁾。SCの概念は、アメリカの政治学者であるパットナムの一連の研究が大きな契機となり、90年代後半から海外の研究者の強い関心を集めることになった⁶⁾。パットナムによれば、SCとは、「社会的な繋がり（ネットワーク）とそこから生まれる規範・信頼であり、共通の目的に向けて効果的に協調行動へと導く社会組織の特徴」とされる⁶⁾。SCは、信頼・規範・ネットワークの3つを主たるの構成要素としている。また、パットナムは、SCの適応される領域として、「教育および児童福祉」、「安全で生産的な近隣地域」、「経済的繁栄」、「健康と幸福感」、「民主主義」の5つの領域を挙げている⁷⁾。

教育および児童福祉とSCの関係性について、パットナムは著書の中で、「子どもの発達には社会関係資本によって強力に形作られる⁸⁾」とし、「児童の家庭内、学校内、友人集団内、そしてより大きなコミュニティ内における信頼、ネットワーク、互酬性の規範は、広範な影響を児童の機会と選択に、そして行動と発達に与えている⁸⁾」と論じている。また、2002年の内閣府委託調査⁶⁾の中で、SCの教育面での成果の可能性について「親が学校に参与することが子どもの学習意欲に影響を与えると考えられている。社会的なつながりが幅広く、多様であるほど、子供達の学習体験の機会が広がるなど、好循環がもたらされる」などの例が挙げられている。さらに、既存の実証調査によって、教育達成度や退学者率等とSCとの相関関係が見出されている⁹⁾。家庭や集団、コミュニティの教育への高い志向が、子どもを伸ばし、励まし、刺激することで教育の達成を促進する、という「SCから教育への作用」と、「教育がSCを作り出す作用」とが考えられている⁹⁾。以上のように、子どもとSCには、密接な関係があるといえる。

しかし、これまでに実証されてきたSCの研究の多くは、20歳以上を対象としたSCの測定を基盤としており、子ども自身のSCの測定はなされていない。

そこで、本研究は、子どもの発達に焦点をあて、子ども自身の性格と嗜好に応じ、子どもが選択できる環境整備について検討するために、子ども自身が認識する子どもと地域との関係の実態を明らかにした。子ども自身が認識する地域との関係実態を明らかにするために、①子どものSCの測定を行うこと、②SCに関して発達の視点から検討するために、小学生と中学生とを比較検討すること、③SCの効果を明らかにするために生活満足度とセルフ・エフィカシーとの関連性を検討することを目的として調査を行った。なお、調査設計については、図1の通りである。

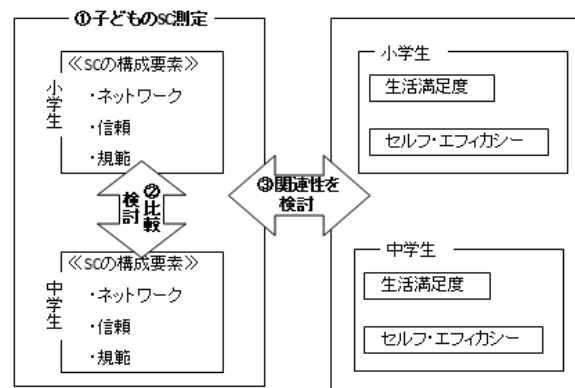


図1 調査設計

2. 研究方法

2.1 調査方法と調査対象

本研究は、内閣府が測定したSCの総合指数^{†1)}が、全国のほぼ中央値に相当するA県にて質問紙調査を実施した。

A県B市C町の小・中学校に通う児童・生徒のうち小学5年生、6年生、中学1～3年生の計349人を対象に質問紙調査を実施した。調査は、いずれも自記式調査法での集合調査法を用いた（調査期間：2009年3月）。クラス担任に調査用紙の配布・回収を依頼した。回収率は100%、有効回答率は92.8%（有効回答数：324人）であった。対象者の基本属性は、表1に示した。

2.2 調査内容

質問紙内の調査内容は、①日常的なつきあいに関する項目（5問）、②地域活動に関する項目（3問）③生活満足度に関する項目（2問）、④他者への信頼に関する項目（7問）、⑤発達に関する項目（16問）、⑥個人の属性に関する項目（3問）の計36問

を設定した。

質問項目の①～⑥の中で、SCに関する項目（①、②、④）および生活満足度（③）に関する項目は、内閣府の指標⁶⁾（日本総合研究所実施が委託を受けて調査・実測）を参考に作成した。本研究では、調査にあたり、内閣府調査と同様の定義を用いた（表2）。SCの構成要素であるネットワークは、「つきあい・交流（①、②の一部）」とし、近所づきあいの数と程度、学校以外での友人と接する頻度、地域のお年寄り、障害のある人と接する頻度、スポーツ・趣味活動への参加状況から測定した。次に、SCの構成要素である信頼は、「信頼（④）」とし、近隣の人、友人、親戚への期待と信頼から測定した。最後に、SCの構成要素である規範は、社会参加をすることで規範を身につけるという観点から「社会参加（②）」とし、地縁的活動・ボランティア活動への参加状況から測定した。また、生活満足度については、「非常に満足している」、「満足している」、「やや不満がある」、「不満である」の4件法にて測定した。

次に、発達に関する項目（⑤）は、セルフ・エフィカシーに関する項目¹⁰⁾を参考に作成した。

なお、質問内容については、小学生・中学生に対してわかりやすくするために、一部改変した。改変にあたっては、小学校、中学校の教諭および学校長と数回にわたる内容の確認・検討を行った。

2.3 分析方法

統計処理は、SPSS（WINDOWS版Ver. 11.5）を用いた。すべての項目について、基礎集計を行った。

SCについては、構成要素である「信頼」を対象別（「家族」、「親類」、「友人」、「先生」、「近所の大人」）に、「大いに頼りになる」に4点、「ある程度頼りになる」に3点、「あまり頼りにできない」に2点、「全く頼りにできない」に1点

表1 フェイス・シート（回答者の基本属性）

		N	%
学年	小学生 5年	55	17.0
	6年	59	18.2
	無回答	1	0.3
	計	114	35.5
	中学生 1年	67	20.7
	2年	69	21.3
	3年	73	22.5
	計	209	64.5
	合計	324	100.0
性別	男	157	48.5
	女	161	49.7
	無回答	6	1.9
	合計	324	100.0
同居家族 (複数回答)	ひとり親	45	13.8
	核家族	266	82.1
	三世代家族	133	41.0
	「きょうだい」がいる	281	86.7

表2 ソーシャルキャピタルの構成要素と具体的質問項目の対応

SC構成要素	内閣府	本研究
ネットワーク	つきあい・交流 ・近所づきあい ・社会的な交流	【近所づきあい】 ・隣近所とのつきあいの程度 ・隣近所とのつきあいの数 【社会的な交流】 ・学校以外で友人と接する頻度 ・地域のお年寄りと接する頻度 ・障害のある人と接する頻度 ・スポーツ・趣味への参加
信頼 (社会的信頼)	信頼 ・相互信頼	【信頼】 ・家族、親戚、友達、先生、近所の大人への信頼
規範 (互酬性の規範)	社会参加 ・社会活動への参加	【参加】 ・地縁的活動への参加 ・ボランティア活動への参加

を付与し、信頼度とした。得点が高いほど、信頼度が高くなるようにした。また、子どものSC指数^{†1)}を算出した。本研究で用いた具体的な質問項目を内閣府調査と同様の定義を用いて整理し、「つきあい・交流」、「信頼」、「社会参加」としたうえで、算出した。算出にあたっては、内閣府調査の手法に基づき算出した（（個々の数値－平均点）/標準偏差）。これを構成要素の「指数」とした。また、構成要素それぞれの指数値の単純平均をとったものを「総合指数」とした。

その後、小学生と中学生のSCの違いを検討するために、以下の分析を行った。①「つきあい・交流」については、小学生・中学生と「近所づきあいの程度」、小学生・中学生と「近所づきあいの数」、小学生・中学生と「対象別の接する頻度」のクロス集計を行い、Mann-Whitney (U) 検定を用いて有意差を検定した。スポーツ・趣味娯楽活動は、小学生・中学生と活動参加の有無のクロス集計を行い、フィッシャーの直説法を用いて有意差の検定を行った。②「信頼」については、信頼の対象別に小学生と中学生の信頼度平均得点のt検定を行った。③「社会参加」については、地縁的な活動とボランティア活動別に、小学生・中学生とそれぞれの活動参加の有無のクロス集計を行い、フィッシャーの直説法を用いて有意差の検定を行った。

セルフ・エフィカシーの17項目については、因子分析（主因子法・バリマックス回転）を行い、因子を抽出し、各因子得点を算出した。小学生と中学生の各因子得点のt検定を行った。生活満足度については、「非常に満足している」に4点、「満足している」に3点、「やや不満がある」2点、「不満足である」に1点を付与し、生活満足度得点とした。

その後、SCの関係性（小学生と中学生の比較を含む）を検討するために、全体・小学生・中学生別に、SC指数（つきあい・交流、信頼、社会参加、総合）とセルフ・エフィカシー（不安、動機、積極性、苦手、総計）のピアソンの相関係数、さらにSC指数と生活満足度得点のピアソンの相関係数を算出した。

2.4 倫理的配慮

調査の続ききとしては、調査実施にあたり調査票の内容および方法について、B市教育委員会の審議、実施許可を経て、対象小学校長および中学校長それぞれに文書にて、教育委員会経由で依頼した。その後、小学校長および中学校長より、許可がでたうえで実施した。

また、調査実施時には、児童および生徒に調査の趣旨、成績には関係ないこと、プライバシーは保護されること、調査への参加は本人の任意であることを文章および口頭にて示した。また、回収時には、対象者に事前配布した封筒に対象者自身が入れ、封をして回収することで、研究者以外が回答内容を見ることができないようにした。

3. 結果

3.1 子ども自身が認識するSCの実態

SCの3つの構成要素別に分析した結果は、以下の通りである。

3.1.1 つきあい・交流

近所づきあいの程度を「生活面で協力する程度」、「立ち話程度」、「あいさつ程度」、「全くない」の4件法で質問した結果、「あいさつ程度」との回答が65.7%と最も多く、次いで「立ち話程度」が16.7%であった（表3）。

また、近所づきあいの人数では、「かなり多くの人（約20人）」、「ある程度（約5～19人）」、「ごく少人数（約4人以下）」、「隣が誰かも分からない」の4件法で質問した結果、「ある程度」との回答が58.4%と最も多く、次いで「ごく少人数」との回答が27.1%であった（表4）。

次に、対象別（「学校以外での友人」、「地域のお年寄り」、「障害のある人」）との接する頻度についての項目では、「毎日」、「週に数回」、「月に数回」、「年に数回」、「全くない」の5件法にて質問した。その結果（表5）、学校以外での友人と接する頻度は、「毎日」が最も多く46.4%、次いで「週に数回」が43.9%であった。地域のお年寄りと接する頻度については、「週に数回」が35.6%と

表3 小・中学校別 つきあい・交流：「近所づきあいの程度」

		生活面で協力する程度	立ち話程度	あいさつ程度	全くない	合計	有意差
近所づきあいの程度	小学生	N 22 % (19.1%)	21 (18.3%)	67 (58.3%)	5 (4.3%)	115 (100%)	***
	中学生	N 35 % (6.4)	53 (15.8%)	142 (70.0%)	16 (7.9%)	203 (100%)	
	合計	N 55 % (11.0%)	74 (16.7%)	209 (65.7%)	21 (6.6%)	318 (100%)	

ノンパラメトリック検定, Mann-whitney(U) 検定を用いて分析した結果を付している。***: U<.001

最も多く、次いで「月に数回」が23%であった。障害のある人と接する頻度については、「年に数回」が最も多く48.1%、次いで「全くない」が20.4%であった。

さらに、スポーツ・趣味・娯楽活動では、40.9%の子どもが参加しているとの回答であった（表6）。

3.1.2 信頼

信頼を対象別（「家族」、「親類」、「友人」、「先生」、「近所の大人」）に、「大いに頼りになる」、「ある程度頼りになる」、「あまり頼りにできない」、「全く頼りにできない」の4件法で信頼度を測定した。その結果（表7）、「友人（3.29）」>「家族（3.17）」>「親戚（2.63）」・「先生（2.63）」>「近所の大人（2.10）」の順であった。

3.1.3 社会参加

社会参加では、地縁的な活動とボランティア活動の参加率を測定した（表8）。その結果、地縁的な活動への参加率は、15.1%と低かった。また、ボランティア活動への参加率も、18.6%と低かった。

3.2 小学生、中学生間のSCの差

子ども自身が認識する地域について、小学生と中学生を比較し、その差を明らかにした。

3.2.1 つきあい・交流

1) 近所づきあいの程度と数

近所づきあいの程度は表3に示すように、小学生、中学生ともに「あいさつ程度」との回答が最も多かった（小学生58.3%、中学生70.0%）。次いで、小学生では「生活面で協力する程度」が19.1%であり、一方中学生では「立ち話程度」が15.8%であった。小学生では、「あいさつ程度」>「生活面で協

表4 小・中学校別 つきあい・交流：「近所づきあいの数」

		N	かなり多く の人	ある程度	ごく少人数	隣が誰かも 分からない	合計	有意差
			%	%	%	%	%	
近所づきあいの数	小学生	15	65	29	4	113	n.s	
		(13.3%)	(57.5%)	(25.7%)	(3.5%)	(100%)		
	中学生	15	116	55	11	197		
		(7.6%)	(58.9%)	(27.9%)	(5.6%)	(100%)		
合計		30	181	84	15	310		
		(9.7%)	(58.4%)	(27.1%)	(4.8%)	(100%)		

ノンパラメトリック検定, Mann-whitney(U)検定を用いて分析した結果を付している. n.s.:有意差なし

表5 小・中学校別 つきあい・交流：「対象別接する頻度」

		N	毎日	週に数回	月に数回	年に数回	全くない	合計	有意差
			%	%	%	%	%		
学校以外での友人と接する頻度	小学生	17	73	13	6	5	114	***	
		(14.9%)	(64.0%)	(11.4%)	(5.3%)	(4.4%)	(100%)		
	中学生	132	68	4	2	1	207		
		(63.8%)	(32.9%)	(1.9%)	(1.0%)	(0.5%)	(100%)		
合計		149	141	17	8	6	321		
		(46.4%)	(43.9%)	(5.3%)	(2.5%)	(1.9%)	(100%)		
高齢者と接する頻度	小学生	19	45	28	11	9	112	n.s	
		(17.0%)	(40.2%)	(25.0%)	(9.8%)	(8.0%)	(100%)		
	中学生	46	68	45	46	0	205		
		(22.4%)	(33.2%)	(22.0%)	(22.4%)	(0%)	(100%)		
合計		65	113	73	57	9	317		
		(20.5%)	(35.6%)	(23.0%)	(18.0%)	(2.8%)	(100%)		
障害のある人と接する頻度	小学生	1	12	14	21	65	113	***	
		(09%)	(10.6%)	(12.4%)	(18.6%)	(57.5%)	(100%)		
	中学生	3	25	45	132	0	205		
		(1.3%)	(11.6%)	(18.6%)	(48.1%)	(20.4%)	(100%)		
合計		4	37	59	153	65	318		
		(1.3%)	(11.6%)	(18.6%)	(48.1%)	(20.4%)	(100%)		

ノンパラメトリック検定, Mann-whitney(U)検定を用いて分析した結果を付している. ***:U<.001

表6 スポーツ・趣味娯楽活動の状況

	N	参加している	参加していない	有意差	
スポーツ・趣味・娯楽活動	小学生	112	48.2%	51.8%	n.s
	中学生	206	36.9%	63.1%	
	合計	318	40.9%	59.1%	

フィッシャーの直説法を用いて分析した結果を示している. n.s.:有意差なし

表7 対象別の信頼度^{注1)}

対象	N	平均値	SD	平均値の差 (小-中)	有意差 ^{注2)}
家族	小学校	115	3.59	0.65	0.65 ***
	中学校	209	2.94	0.89	
	合計	324	3.17	0.87	
親戚	小学校	111	2.96	0.84	0.46 ***
	中学校	207	2.51	0.92	
	合計	318	2.63	0.92	
友人	小学校	113	3.47	0.71	0.28 *
	中学校	206	3.18	0.81	
	合計	319	3.29	0.78	
先生	小学校	112	2.95	0.96	0.48 ***
	中学校	209	2.46	0.97	
	合計	321	2.63	0.99	
近所の大人	小学校	113	2.41	0.94	0.47 ***
	中学校	208	1.94	0.93	
	合計	321	2.10	0.96	

平均は、4段階尺度(「大いに頼りになる=4」から「全く頼りにならない=1」)から得られた回答の平均得点を示す。

注1 得られた回答の平均得点を信頼度とした。

注2 平均値の差のt検定を実施。***:p<.001, *:p<.05で有意差あり。

表8 社会活動への参加状況

	N	参加している	参加していない	有意差	
地縁的な活動への参加状況	小学生	110	34.5%	65.5%	***
	中学生	201	4.5%	95.5%	
	合計	311	15.1%	84.9%	
ボランティアへの参加状況	小学生	110	21.8%	78.2%	n.s
	中学生	201	16.9%	83.1%	
	合計	311	18.6%	81.4%	

フィッシャーの直説法を用いて分析した結果を示している。***:p<.001, n.s:有意差なし

力する程度」>「立ち話程度」>「全くない」の順であった。中学生では、「あいさつ程度」>「立ち話程度」>「生活面で協力する程度」>「全くない」の順であった。近所づきあいの程度では、小学生、中学生間で有意な差がみられた(U<.001)。

また、近所づきあいの人数は表4に示すように、小学生、中学生ともに「ある程度」との回答が最も多かった(小学生57.5%, 中学生58.9%)。次いで、小学校、中学校ともに「ごく少数」との回答が多くなっていった(小学生25.7%, 中学生27.9%)。近所づきあいの人数では、小学生、中学生間で有意な差はみられなかった。

2) 対象別の接する頻度

次に、対象別(「学校以外での友人」, 「地域のお年寄り」, 「障害のある人」)の接する頻度についての項目については、表5に示すとおりである。

学校以外での友人と接する頻度については、小学生が「週に数回」が64.0%であったのに対し、中学生は「毎日」が63.8%となっていた。次いで、小学生では「毎日」が14.9%と多くなっていった。一方、中学生は、「週に数回」が32.9%と多くなっていった。学校以外で友人と接する頻度で、小学生、中

生間で有意な差がみられた(U<.001)。

地域のお年寄りと接する頻度については、小学生、中学生ともに「週に数回」が最も多くなっていった(小学生40.2%, 中学生33.2%)。次いで、小学生は「月に数回」が25%であったのに対し、中学生は「毎日」, 「年に数回」が22.4%であった。地域のお年寄りと接する頻度で、小学生、中学生間で有意な差はみられなかった。

障害のある人と接する頻度については、小学生では「全くない」が57.5%と最も多い、一方、中学生では、「年に数回」が48.1%と最も多くなっていった。次いで、小学生では、「年に数回」が18.6%と多く、中学生では「月に数回」18.6%であった。中学生では、「全くない」と答えた学生はいなかった。障害のある人と接する頻度で、小学生、中学生間で有意な差がみられた(U<.001)。

3) スポーツ・趣味・娯楽活動の参加

スポーツ・趣味・娯楽活動は表6に示すように、小学生の参加率は48.2%, 中学生は36.9%であった。スポーツ・趣味・娯楽活動の参加有無では、小学生、中学生間で有意な差はみられなかった。

3.2.2 信頼

信頼については表7に示すように、「家族」「親戚」「友人」「先生」「近所の大人」の各々の平均点は、全て小学生の方が中学生よりも高い得点となっていた（小学生・中学生間で有意差があった）。信頼度が最も高いのは、小学生では「家族」、中学生では「友人」であった。

3.2.3 社会参加

地縁的な活動、ボランティア活動のそれぞれの参加の有無については、表8に示した通りである。地縁的な活動への参加率は、小学生では34.2%、中学生では4.5%であった（小学生・中学生間で有意差があった）。次に、ボランティア活動への参加率は、小学生では21.8%、中学生では16.9%であった（小学生・中学生間に有意差はみられなかった）。

3.3 子どものSC指数とセルフ・エフィカシーおよび生活満足度との関係

3.3.1 子どものSC指数の算出

子どものSC指数は表9に示したように、「つきあい・交流」の指数は中学生の方が小学生よりも高く、「信頼」・「社会参加」の指数は小学生の方が中学生よりも高くなっていった。

3.3.2 子どものSC指数とセルフ・エフィカシーとの関係

セルフ・エフィカシーに関する17項目の因子分析を行った結果は、表10に示すとおりである。

第1因子は、「小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである」、「何かをするとき、うまくいかないのではと不安になることが多い」、「人と比べて心配性なほうである」、「どうやったらよいか決心がつかずに仕事にとりかかれなことがよくある」、「過去に犯した失敗や嫌な体験を思い出して、暗い気持ちになることがよくある」という項目であり、「失敗に対する不安」とした。

第2因子は、「友人よりも特に優れた知識を持っている分野がある」、「友人より優れた能力がある」、「人より記憶力がよいほうである」、「世の中に貢献できるちからがあると思う」という項目であり、「能力の社会的動機付け」とした。

第3因子は、「何か仕事をするときは、自信をもってあるほうである」、「結果の見通しがつかない仕事でも積極的に取り組んでいくほうだと思う」、「どんなことでも積極的にこなすほうである」、「何かを決めるときは迷わずに決定するほうである」という項目であり、「行動の積極性」とした。

第4因子は、「積極的に活動するのは苦手なほうである」、「引っ込み思案なほうだと思う」という項目であり、「行動の苦手意識」とした。

以上4因子を下位尺度とし、項目平均点と総点を算出した結果は、表11に示すとおりである。小学生・中学生間での有意な差はみられなかった。

表9 小・中学校別 ソーシャルキャピタル指数

指標	小学校			中学校			平均値の差 (小-中)	有意差 ^{注1)}
	N	平均値	SD	N	平均値	SD		
つきあい・交流	104	-0.11	0.65	192	0.07	0.51	-0.180	*
信頼	105	0.33	0.63	204	-0.19	0.73	0.515	***
社会参加	108	0.20	0.85	199	-0.18	0.57	0.374	***
総合指数	92	0.13	0.48	183	-0.10	0.40	0.224	***

平均値の差のt検定を実施。***:p<.001, *:p<.05で有意差あり。

表10 児童のセルフ・エフィカシー

セルフ・エフィカシー	因子負荷量			
	失敗に対する不安	能力の社会的動機付け	行動の積極性	行動の苦手意識
14 小さな失敗でも人よりずっと気にするほうである	0.65	0.00	-0.05	0.05
7 何かをするとき、うまくいかないのではと不安になることが多い	0.60	-0.06	-0.11	0.20
4 仕事を終えた後、失敗したと感じることのほうが多い	0.59	-0.04	0.02	0.30
5 人と比べて心配性なほうである	0.57	0.07	-0.01	0.00
11 どうやったらよいか決心がつかずに仕事にとりかかれなことがよくある	0.56	0.05	-0.15	0.28
2 過去に犯した失敗や嫌な体験を思い出して、暗い気持ちになることがよくある	0.55	0.09	-0.08	-0.02
12 友人よりも特に優れた知識を持っている分野がある	0.12	0.76	0.04	0.04
3 友人より優れた能力がある	-0.02	0.73	0.18	-0.02
9 人より記憶力がよいほうである	-0.01	0.40	0.24	-0.09
16 世の中に貢献できる力があると思う	0.05	0.38	0.24	-0.20
1 何か仕事をするときは、自信を持ってやるほうである	-0.09	0.20	0.61	-0.16
10 結果の見通しがつかない仕事でも、積極的に取り組んでゆくほうだと思う	-0.03	0.16	0.56	-0.28
13 どんなことでも積極的にこなすほうである	0.00	0.21	0.55	-0.31
6 何かを決めるとき迷わずに決定するほうである	-0.25	0.11	0.48	0.14
15 積極的に活動するのは、苦手なほうである	0.25	0.02	-0.27	0.72
8 引っ込み思案なほうだと思う	0.24	-0.15	-0.14	0.52

因子抽出法: 主因子法 回転法: Kaiser の正規化を伴わないバリマックス法

SCとセルフ・エフィカシーとの関係性についての結果は、表12に示したとおりである。SCの構成要素である「つきあい・交流」・「社会参加」とセルフ・エフィカシーの総計との間で正の相関がみられた。また、SCの構成要素すべてと「能力の社会的動機付け」との間で正の相関がみられた。特に、小学生では、「つきあい・交流」と「能力の社会的動機付け」との間で中程度の相関（相関係数0.376）があった。

3.3.3 SC指数と生活満足度との関係

SCと生活満足度との関係性についての結果は、表13に示したとおりである。

SCの構成要素である「信頼」と生活満足度の間には、中程度の相関（相関係数0.379）関係であった。また、小学生、中学生別の相関関係を検討した結果、小学生、中学生ともに「信頼」と生活満足度との間で正の相関がみられた。小学生においては、「つきあい・交流」でも弱い正の相関関係（相関係数0.24）がみられた。

4. 考察

本研究は、子どもの発達に焦点をあて、子ども自身の性格と嗜好に応じ、子どもが選択できる環境整備について検討するための基礎として、子どもの

表11 小・中学校別 セルフ・エフィカシーの状況

	N	平均値	標準偏差	平均値の差 (中-小)	有意差
失敗に対する不安	小学生	115	0.58	0.34	-0.01 n.s
	中学生	209	0.57	0.33	
	合計	324	0.58	0.33	
能力の社会的動機付け	小学生	115	0.31	0.34	0.01 n.s
	中学生	209	0.32	0.33	
	合計	324	0.32	0.33	
行動の積極性	小学生	115	0.41	0.34	0.05 n.s
	中学生	209	0.45	0.36	
	合計	324	0.44	0.35	
行動の苦手意識	小学生	115	0.55	0.42	0.00 n.s
	中学生	209	0.54	0.42	
	合計	324	0.54	0.42	
総計	小学生	114	7.46	2.81	0.18 n.s
	中学生	206	7.64	3.09	
	合計	320	7.58	2.99	

t検定を用いて分析した結果を示している。n.s:有意差なし。

表12 ソーシャルキャピタルとセルフ・エフィカシーとの相関関係

	つきあい	信頼	参加	SC総合指数	不安	動機	積極性	苦手	セルフ・エフィカシー 総計	
全体	つきあい・交流	-	0.024	0.232 ***	0.576 ***	0.029	0.288 ***	0.252 ***	-0.200 **	0.211 ***
	信頼	-	0.146 **	0.648 ***	-0.114 *	0.126 *	0.137 *	-0.058	0.035	
	社会参加	-	0.726 ***	0.043	0.153 **	0.071	0.071	0.018	0.141 *	
	SC総合総数	-	-	-0.020	0.291 ***	0.222 ***	-0.108	0.197 **		
	不安	-	-	-	0.019	-0.214 ***	0.406 ***	0.693 ***		
	動機	-	-	-	-	0.388 ***	-0.165 **	0.601 ***		
	積極性	-	-	-	-	-	-0.392 ***	0.397 ***		
	苦手	-	-	-	-	-	-	0.293 ***		
	セルフ・エフィカシー総計	-	-	-	-	-	-	-		
小学校	つきあい・交流	-	0.110	0.278 **	0.691 ***	0.070	0.376 ***	0.284 **	-0.220 *	0.306 **
	信頼	-	0.046	0.524 ***	-0.152	0.091	0.299 **	-0.147	0.036	
	社会参加	-	-	0.770 ***	0.051	0.171	0.122	0.034	0.188	
	SC総合総数	-	-	-	0.007	0.333 **	0.342 **	-0.158	0.277 ***	
	不安	-	-	-	-	-0.014	-0.256 **	0.336 ***	0.688 ***	
	動機	-	-	-	-	-	0.442 ***	-0.357 ***	0.573 ***	
	積極性	-	-	-	-	-	-	-0.444 ***	0.380 ***	
	苦手	-	-	-	-	-	-	-	0.153	
	セルフ・エフィカシー総計	-	-	-	-	-	-	-	-	
中学校	つきあい・交流	-	0.083	0.283 ***	0.624 ***	-0.005	0.233 **	0.227 **	-0.191 **	0.148 *
	信頼	-	0.082	0.681 ***	-0.125	0.155 *	0.123	-0.033	0.043	
	社会参加	-	-	0.661 ***	0.042	0.156 *	0.060	0.002	0.136	
	SC総合総数	-	-	-	-0.038	0.282 ***	0.194 **	-0.090	0.175 *	
	不安	-	-	-	-	0.037	-0.191 **	0.444 ***	0.698 ***	
	動機	-	-	-	-	-	0.360 ***	-0.060	0.616 ***	
	積極性	-	-	-	-	-	-	-0.366 ***	0.404 ***	
	苦手	-	-	-	-	-	-	-	0.363 ***	
	セルフ・エフィカシー総計	-	-	-	-	-	-	-	-	

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05で有意差あり。

表13 ソーシャルキャピタルと生活満足度との相関関係

		つきあい	信頼	参加	総数	生活満足度
全体	つきあい	-	0.024	0.232 ***	0.576 ***	0.086
	信頼		-	0.146 *	0.648 ***	0.379 ***
	参加			-	0.726 ***	0.032
	総数				-	0.271 ***
	生活満足度					-
小学校	つきあい	-	0.110	0.278 **	0.691 ***	0.240 *
	信頼		-	0.046	0.524 ***	0.301 **
	参加			-	0.770 ***	0.003
	総数				-	0.283
	生活満足度					-
中学校	つきあい	-	0.083	0.283 ***	0.624 ***	0.084
	信頼		-	0.082	0.681 ***	0.317 ***
	参加			-	0.661 ***	-0.104
	総数				-	0.168 *
	生活満足度					-

***:p<.001, **:p<.01, *:p<.05で有意差あり.

SCの測定を行った。SCに関して発達の視点から検討するために小学生と中学生とを比較検討をした。また、SCの効果を明らかにするために生活満足度とセルフ・エフィカシーとの関連性を検討した。

4.1 子どものSCに関する小学生と中学生の比較

子どものSCの測定を行い、SCの構成要素別に小学生と中学生とを比較した結果、「つきあい・交流」では、小学生、中学生ともに友人と接する頻度が高くなっていった。また、友人と障害のある人との「つきあい・交流」以外は、小学生の方が中学生よりも密に行っていた（表3～6）。

中学生で友人と接する頻度が高く、近所づきあいや高齢者との付き合いが小学生に比べ少ない背景には、中学生のライフスタイルが影響していると考えられる。放課後や休日にも部活動や塾があり、友人と接する機会が多い。そのため、中学生は、部活や塾などの友人を中心とした特定の集団との関係性を密にすることを積極的に行っているおり、一方、近所の大人との交流は受動的になっていると考えられる。また、障害者と接する頻度について、小学生より中学生の方が接する頻度が高かった背景には、授業や課外活動を通じた、障害に関する学習による知識の広がりや経験の差が、小学生・中学生間で生じたことが影響していると考えられる。

次に、「信頼」では、すべての対象者（家族、親戚、友人、先生、近所の大人）への信頼度について、小学生の方が中学生よりも高くなっていった（表7）。

小学生の方が中学生よりも信頼度が高い背景には、心理的発達による影響が一因として考えられる。心理的発達段階において、小学生は児童期、中学生は青年期にあたる。青年期は、一人の独立した

人間として生きていくための基礎的な能力¹¹⁾の獲得を行う時期である。そのため、中学生は、友人との関係を強固にし、両親や他の大人からの独立のため距離を置くようになる。この心理的発達による変化が、信頼度に影響したと考えられる。また、信頼できると答えた割合が、「友人」や「家族」が高く、子ども自身が身近に感じる順になっている（表7）。このことから、日常的関わりの経験が信頼度に影響を与えているとも考えられる。

最後に、「社会参加」では、全ての活動（ボランティア活動、地縁的活動）で小学生の方が中学生より参加率が高くなっていった（表8）。

小学生の参加状況が高い背景には、社会資源と位置づけられている活動（子ども会など）の中心が、小学生までであるためと考えられる。つまり「社会参加」には、小学生・中学生間での学校や塾、地域活動の場など子どもを取り巻く環境の違いが影響していると考えられる。

以上のことから、小学生と中学生間でSCに差が生じる背景には、心理的発達と子どもを取り巻く環境の2つの要因があると示唆される。

4.2 SCとセルフ・エフィカシーおよび生活満足度との関係によるSCの効果

SCの効果を明らかにするために、SCとセルフ・エフィカシーおよび生活満足度との関係性を検討した。

SCとセルフ・エフィカシーとの関係を検討した結果、SCの構成要素すべてにおいて、セルフ・エフィカシーの「能力の社会的動機付け」に影響を与えていた。特に、小学生ではSCの構成要素である「つきあい・交流」からの影響が大きくなっていった（表12）。

セルフ・エフィカシーとは、自分の行動を自分が統制し、必要な行動を効果的に遂行できるという可能性の認知および信念のことをいう¹²⁾。セルフ・エフィカシーの因子の中でも「能力の社会的動機付け」は、自己の能力を社会的に評価することで認知することができるものである。そのため、「つきあい・交流」を通しての社会的な自己の評価が、「能力の社会的動機付け」に影響していると考えられる。

また、SCと生活満足度との関係性については、SCの構成要素である「信頼」が、生活満足度に影響を与えていた(表13)。

以上のことから、SCは、セルフ・エフィカシーや生活満足度といった、子どもの行動や生活に効果があることが示唆された。

5. おわりに

本研究は、子どもの発達に焦点をあてた地域環境の整備について検討するために、子ども自身が認識する地域との関係の実態をSCの概念を用いて明らかにしてきた。

結果および考察より、子ども自身が認識するSCは、心理的発達と子どもを取り巻く環境により変化することが示唆された。また、子ども自身のSCが、子どもの行動や生活に影響していることが明らかとなった。

そこで、子どもの発達に焦点をあてた地域環境の整備のためには、子どもの心理的発達や子どもを取り巻く環境の変化に応じたSCの蓄積の仕組みについて検討する必要がある。しかし、本調査では、その具体的な方策まで、考察することはできなかった。そこで、今後は、さらに分析を深め、検討していきたい。

注

†1) 内閣府は、SCの3つの構成要素(ネットワーク・規範・信頼)に該当する個別指標について、相互比較が可能なように基準化(平均点を0、標準偏差と分散を1となるように標準化)した後に、3要素それぞれについて採用する個別指標の単純平均をとり、これをそれぞれの構成要素の「指標」とした。さらに3構成要素それぞれの指標値の単純平均をとったものを求め、「総合指数」と呼ぶこととした。

文 献

- 1) 柏女霊峰：児童や家庭に対する支援と児童・家庭福祉制度－児童福祉論。社会福祉士養成講座編集委員会編，初版，中央法規株式会社，東京，3，2009。
- 2) 傳馬淳一郎：「子育て支援」概念に関する研究－親子を取り巻く環境と、支援の機能－。北星学園大学大学院社会福祉学研究所北星学園大学大学院論集，9，13-30，2006。
- 3) 日本学術会議：我が国の子どもの成育環境の改善にむけて－成育方法の課題と提言－。1-20，2011。
- 4) 内閣府：平成22年版子ども・子育て白書。佐伯印刷，東京，2-22，2010。
- 5) 川島ゆり子：ソーシャル・キャピタル論の社会福祉研究への援用－地域を基盤とする社会福祉実践の展開に向けて－。日本の地域福祉，21，43-57，2008。
- 6) 内閣府国民生活局市民活動促進課：ソーシャルキャピタル：豊かな人間関係と市民活動の好循環を求めて。独立行政法人国立印刷局，東京，1-11，33-38，2003。
- 7) 藤澤由和・濱野勉・小藪明生：ソーシャル・キャピタル概念の適応領域とその把握に関する研究。新潟医療福祉学会誌，7(1)，26-32，2007。
- 8) ロバート・D・パトナム：孤独なボウリング－米国コミュニティの崩壊と再生。柴田康文訳，柏書房株式会社，東京，362，2009。
- 9) 諏訪徹：福祉の学習活動の理論に対するソーシャル・キャピタル論の適用の可能性に関する予備的考察。福祉教育・ボランティア学習研究年報，12，210-233，2007。
- 10) 東條光彦・坂野雄二：心理アセスメントハンドブック第2版。上里一郎監修，2版，西村書房，新潟，425-434，2003。
- 11) 北川歳昭：発達心理学の基礎 I ライフサイクル。平山論・鈴木隆男編，12版，ミネルヴァ書房，京都，71，101，2001。
- 12) 清水裕：心理測定尺度集 I - 人間の内面を探る<自己・個人内過程>。堀洋道監修，山本真理子編，5版，27，2001。

(平成24年1月4日受理)

The Role of a Community Focused on Child Development –from the Measurement of the Social Capital a Child Recognizes–

Hiroko OKAMASA and Toyohiro TAGUCHI

(Accepted Jan. 4, 2012)

Key words : social capital, community, child development, environment

Abstract

In Japan, low birthrate, life longevity and the trend toward the nuclear family made the relationships with relatives and the surrounding community harder to sustain. As a result, a community decline was caused. This had a big influence on the child-rearing or child-growth. The environmental management based on the relationship of the community is important.

So, in this research, the community which a child recognizes was investigated using social capital. And the social capital of an elementary school and a junior high school student was compared. Moreover, relevance with social capital, life satisfaction, and self efficacy was examined.

The following things became clear as a result of the investigation. The elementary school student and the junior high school student have strong relationships with their friends. The elementary school student's social capital is higher than the junior high school students. Social capital influences life satisfaction and self efficacy.

Correspondence to : Hiroko OKAMASA

Doctoral Program in Social Work,
Graduate School of Health and Welfare,
Kawasaki University of Medical Welfare
Kurasiki, 701-0193, Japan
E-Mail : w7108002@kwmw.jp

(Kawasaki Medical Welfare Journal Vol.21, No.2, 2012 184 – 194)